

の底魚類が多く、カツオ餌料対象魚としてはタカサゴ、ミズン、テンジクダイ、スズメダイが確認されたが量的に少ない。標本船の報告によると昭和52年10月上旬から中旬にかけて魚礁付近でミズン1,700kgを漁獲しており時期的に蛸集構造の変化がみられる。

8 総 括

1) 活動の概要

年 月 日	活 動 の 内 容
昭和52年度	
昭和52年	
11月4日～8日	○本部町漁協において、調査研究活動地域の選定理由、活動の目的、方法の説明協力方依頼及びカツオ餌料用人工魚礁調査、人工海草のとりつけ。
昭和53年1月28日	○第1回検討会のうち合せ。
2月2日～3日	○第1回検討会（本部町漁協において、カツオ船船主、船長、エサ採業者、町役場水産係、水試間の検討会。
3月20日	○第2回検討会。
3月23日～25日	○南西海区水研、幹事会。
昭和53年度	
昭和53年5月8日～11日	○餌料用人工魚礁調査及び黒潮流軸の変動報告。
6月5日～6日	○第2琉球ソネのロラン位置の報告。餌料標本船の委託契約、及び餌料船への乗船調査。
8月25日～26日	○餌料用人工魚礁調査。
12月26日～27日	○第3回目検討会及びカツオ漁場図、黒潮流軸の変動報告。
10月17日～19日	○南西海区水研、ブロック幹事会。
昭和54年	
2月22日～24日	○カツオ漁船の構造および装備についての視察。
3月19日～20日	○場内報告会及び次年度検討。
3月21日～25日	○南西海区水研ブロック会議。

2) 確定された指導内容

項 目	区 分	指 導 内 容
カツオ餌料について	研 究	カツオ漁業と漁況との関連及び餌料魚の生態
エサ魚礁について	”	餌料魚の時期的蛸集
カタクチイワシの移殖放流	”	過去5回の放流試験結果
カツオ回遊について	”	迅速なカツオ回遊状況の通報及び集積資料の配布
黒潮のうごきについて	”	季節別流軸の報告
餌料対象魚について	行 政	漁業調整の検討
地先漁場の汚染について	”	赤土の漁場環境及び魚へ及ぼす影響

3) 残された問題点及び解決の方向

区分	問題点	解決の方向
試験研究上 行政上	餌料魚の長期蓄養 餌料船の人員 沖合域（水深100以浅） の未利用餌料について 乗組員の老令化 経営体の資本力の弱さ	県単、カツオ餌料安定供給に関する試験研究で事業実施中。 浮敷網、棒受網等の採用による減員。 水試で調査する必要がある。 後断者育成のための施設が必要。 補助融資等の側面的援助。

4) 総合考察

本部地区のカツオ餌料魚は、沿岸リーフ域を棲息領域するイワシ類が主体であるが近年の山地開発、土木工事の結果、陸土の流入により、沿岸水帯の透明度や底質環境が変化し、近年は本部半島の餌場において、外洋性のキビナゴが減少し内湾性のミズン、水スルル、ドロクイ等が増加している。餌料魚の来遊、発生状況の変化は外部要因による生態系の変化の表われとみてよいであろうし、この問題については行政レベルで問題解決の方向が考えられよう。

漁具漁法についても、当水試では5名程度で操業可能な浮敷網を採用しているが業界が使用している餌採り用漁具は、敷網類の四双張網を使っているが操業人員が12～15名の多人数を要することから、大巾な減員策が望まれる処であり、水試の浮敷網を含めより効率的漁具漁法の改善又は導入等について、再検討すべき時期に達しており、業界と水試の共同研究の課題といえよう。

蓄養及び活力の面では、関係者一同関心の深いところであるが、過去の試験の実績は少ないが水試としても事業を実施している。沖縄地元産魚種の耐蓄養性、活力試験に重点がおかれるのは言うまでもない。またカツオ餌料魚の安定供給が目標であることから、常時餌料魚が大規模な蓄養施設に大量収容ができるような、沖縄の海域に適した蓄養技術の開発研究も含めている。従って、今後の課題であり、経営上の収支も考慮すべきであるが、大型運搬船により、九州方面から餌料魚を輸送し、蓄養基地を設定する構想も一考すべきと思われる。

参考文献

- 沖縄水試、組織的調査研究活動推進事業報告書（1977）
- 沖縄水試、人工魚礁設置に関する調査報告書（1976）